経営學史学会通信

第24号　2017年10月

ご挨拶

経営学史学会理事長　勝　部　伸　夫

経営学史学会第25回全国大会は，統一論題に「経営学史研究の挑戦」というテーマを掲げ，青森中央学院大学において5月26日，27日，28日の3日間開催されました。大会を周到に準備され，おもてなしの気持ちで迎えて頂きました小松原聡実行委員長をはじめとする実行委員会の先生方，学生スタッフの皆さんには衷心より御礼申し上げます。

今大会では役員の改選が行われ，選出された新理事の中から，私が第9期理事長に推挽されました。これまで本学会の運営に多少携わってきたとはいえ，今度は学会の舵取りをする責任ある立場です。大変光栄なこととは存じますが，浅学非才の身で理事長という大役を担うことの重責をひしひしと感じているところです。これからの3年間，微力ながら本学会の運営に全力で取り組んでいく覚悟ですので，宜しくお願い申し上げます。私にとって心強いのは，今期の理事会には経験豊富な先生方とともに，次代を担う若い先生方にも多く入って頂いている点です。運営に当たっては，東の三井泉先生，西の渡辺敏雄先生に副理事長として両脇をしっかり固めてもらった上で，運営委員会，理事会の先生方からは新しい発想や斬新なアイデアを積極的に出してもらい，それらを実行に移していけるのではないかと期待しているところです。

ところで経営学史学会は設立されて四半世紀を経たわけですが，この間，経営学をめぐる状況は大きく変化してきています。周知の通り，経営学の研究は実証が中心になってきており，とりわけ若い研究者の間にはその傾向が強く見られます。これに対して経営学史研究は，経営学を歴史の中に位置づけ，その時代の理論の背景や意義を深く学ぶことを通じて，われわれが生きる現代社会の問題と経営学理論の現在を問うていこうとするものです。換言すれば，過去に学ぶことを通じて現在を問い，そして未来を照射していこうとする重要な学問だと言えます。ところが，それ故にと言うべきか初学者には敷居も高く，また上記のような流れの中で経営学史研究の意義が十分に理解されないまま「古臭い」として敬遠されがちです。これは経営学研究においては言うまでもなく，本学会にとっても不幸だと言わざるを得ません。ただし，この状況を嘆いているだけでは問題解決にはならないのであって，学会として具体的にどう立ち向かっていくのかが今問われているのではないでしょうか。

これからさまざまな取り組みをしていく所存です。例えば，ネットを使った情報発信などもこれまで以上に積極的にやっていきたいと考えています。しかし忘れてならないのは，学会にとって何よりも大切なのはよい報告が聞け，議論を戦わせることを通じて研究が深まっていくことです。全国大会そして各部会を魅力的で充実したものにし，「この学会に入ってよかった」と感じてもらえるよう精一杯努力いたします。どうか会員の皆さまのご協力とご支援をお願い申し上げます。

第25回全国大会を振り返って

経営学史学会第25回全国大会は，2017年5月26日（金）から28日（日）にかけて青森中央学院大学において開催された。今大会は，第23回大会「経営学の批判力と構想力」そして第24回大会「経営学史研究の興亡」に続く，経営学史研究の意義を問う区切りの大会として「経営学史研究の挑戦」という統一論題が掲げられた。とりわけ，本テーマを実践から問うことを意識し，「経営学史研究にみる実践への挑戦」と「経営学史研究から実証研究への挑戦」という2つのサブ・テーマが設けられた。

27日午前に3会場で行われた自由論題報告のあと，大会実行委員長の小松原聡会員による開会の辞が述べられ，吉原正彦理事長による「経営学史研究の挑戦―その持つ意味―」と題する基調報告が行われた。引き続いて，2日間にわたって統一論題について4つの報告が行われた。

27日は，サブ・テーマⅠ「経営学史研究にみる実践への挑戦」のもと，梶脇裕二会員の「経営学史研究の意義を探って―実践性との関連で―」，および辻村宏和会員の「経営学の“実践性”と経営者育成論（経営教育学）の構想」と題する報告がなされた。翌28日はサブ・テーマⅡ「経営学史研究から実証研究への挑戦」のもと，勝部伸夫会員の「経営学の『実践性』を問う―経営学とは何か―」，および宇田川元一会員の「物語る経営学史研究」と題する報告がなされた。両日の各報告はいずれも，学問としての経営学と経営実践の関係性について真正面から問う内容であり，独自性と独創性のある主張は統一論題に即したものであった。また討論者からの各報告に対する討論課題のもと，会場での議論が活発に展開された。

自由論題報告も2日間で3会場において6つの報告が行われた。各報告者からの意欲的な研究成果が発表され，いずれの会場でも活発な質疑応答がなされた。

会員総会では1年間の活動報告と収支決算報告があり，そのあと次年度の活動計画と収支予算案が説明され承認された。続いて第9期役員選挙が行われた。また，本年度の経営学史学会賞著書部門が，岩田浩会員の『経営倫理とプラグマティズム―ジョン・デューイの思想に依拠した序説的考察―』（文眞堂）に授与されることが杉田博学会賞審査委員長から発表された。なお，次回26回大会については神戸大学での開催が決定したことが報告され，開催校を代表して上林憲雄会員より挨拶があった。

新緑の青森での今大会が充実した内容となったのは，小松原聡大会実行委員長をはじめ，青森中央学院大学の先生方，そして多くの学生の皆様による周到な準備と大会期間中における配慮のおかげである。心より感謝申し上げたい。

（幹事　河辺　純　記）

第 25 回全国大会 会員総会議事録

日時：2017 年 5 月 27 日（土）16：10 ～ 17：30
場所：青森中央学院大学　7 号館 1 階　711 教室
議題：

1．2016 年度活動報告について

吉原正彦理事長からの開会の宣言の後，総務担当の風間信隆理事から配布資料に基づいて報告がなされ，異議なく了承された。九州部会での活動報告が福永文美夫理事から行われた。

2．2016 年度収支決算報告について

事務局の藤沼司幹事から配布資料に基づいて説明があり，引き続き，勝部伸夫会計監事から収支決算が適正である旨，報告があった。決算報告については異議なく了承された。

3．2017 年度活動計画について

総務担当の風間理事から配布資料に基づいて説明があり，異議なく了承された。

4．2017 年度収支予算について

事務局の藤沼幹事から配布資料に基づいて説明があり，異議なく了承された。

5．新入会員・退会者について

総務担当の風間理事から資料に基づいて説明があり，異議なく了承された。詳細は以下の通りである。

普通会員	219 名
終身・顧問会員	15 名
院生会員	22 名
合　計	256 名
賛助会員	2 社（3 口）：以上，2017 年 5 月 26 日現在

本学会に所属されていた会員で，逝去された会員に黙祷が捧げられた。
（物故者　村山元英会員，岡本康雄会員，杉本常会員，大島國雄会員，日高定昭会員，水原煕会員）

6．第 9 期役員選挙

選挙管理委員長に藤井一弘会員が指名される。選挙管理委員として，東西ブロックから各 3 名（東：杉田博会員，藤沼司会員，松田健会員／西：梶脇裕二会員，河辺純会員，山縣正幸会員）の計 6 名が指名された。

7．2016 年度経営学史学会賞審査報告について

杉田博学会賞審査委員長から審査の経過と結果が報告され，2016 年度の経営学史学会賞に岩田浩会員の『経営倫理とプラグマティズム―ジョン・デューイの思想に依拠した序説的考察―』（文眞堂）が選出されたことが発表された。その後，岩田会員の表彰と受賞の挨拶が行われた。

8．第 26 回全国大会の開催校について

第 26 回全国大会開催校・開催期間について吉原理事長より説明があり，併せて次期開催校代表として神戸大学の上林憲雄会員から挨拶があった。次期大会の開催時期は，2018 年 5 月第 3 週（5/18–20）で調整を行うことが報告された。

9．その他

配付資料に基づいて，吉原理事長より「第 8 期理事会から第 9 期理事会への申し送り事項」の説明が行われた。

以　上

第 9 期　経営学史学会役員

（2017 年 5 月～ 2020 年 5 月）

理 事 長　勝部　伸夫（専修大学）

副理事長　三井　泉（日本大学）　渡辺　敏雄（関西学院大学）

理　事

東ブロック	西ブロック
石嶋　芳臣（北海学園大学）	梶脇　裕二（龍谷大学）
勝部　伸夫（専修大学）	河辺　純（大阪商業大学）
杉田　博（石巻専修大学）	中條　秀治（中京大学）
丹沢　安治（中央大学）	辻村　宏和（中部大学）
沼上　幹（一橋大学）	三戸　浩（長崎県立大学）
藤沼　司（青森公立大学）	山縣　正幸（近畿大学）
松田　健（駒澤大学）	渡辺　敏雄（関西学院大学）
三井　泉（日本大学）	

会計監事　藤井　一弘（青森公立大学）　上林　憲雄（神戸大学）

顧　問　三戸　公　加藤　勝康

幹　事　渡辺　泰宏（東京富士大学）　庭本　佳子（神戸大学）

総務担当理事　三井　泉

年報・通信編集担当理事　渡辺　敏雄

財務会計担当理事・事務局　藤沼　司

運営委員会・年報編集委員会

勝部　伸夫，河辺　純，藤沼　司，松田　健，三井　泉，渡辺　敏雄，庭本　佳子，渡辺　泰宏

日本経済学会連合評議員・経営関連学会協議会評議員

丹沢　安治，松田　健

2016 年度収支決算

自：2016 年 4 月 1 日
至：2017 年 3 月 31 日

（単位：円）

収入の部			支出の部		
科目	予算	実績	科目	予算	実績
前年度繰越金	2,118,385	2,118,385	大会費 (3)	250,000	228,000
会費収入 (1)	1,800,000	1,780,000	年報買上げ費 (4)	900,000	765,450
賛助会員会費	90,000	60,000	年報発送費	50,000	38,500
大会費戻入 (2)		200,000	編集委員会費	50,000	32,190
雑収入	500	8	「通信」作成費	60,000	59,400
当期収入合計	1,890,500	2,040,008	会議費・交通費	600,000	596,500
			郵便・通信費	100,000	74,775
			振込み手数料 (5)	30,000	24,752
			事務局費 (6)	300,000	204,241
			日本経済学会連合分担金	35,000	30,000
			経営関連学会協議会会費	30,000	30,000
			年報査読委員手当 (7)	100,000	80,000
			経営学史学会賞審査委員手当	30,000	30,000
			九州部会費	50,000	50,000
			中部部会費	50,000	0
			経営学史学会賞副賞	100,000	100,000
			予備費 (8)	100,000	0
			当期支出合計	2,835,000	2,343,808
			次年度繰越金 (9)	1,173,885	1,814,585
合計	4,008,885	4,158,393	合計	4,008,885	4,158,393

注

(1) 一般会員 211 口（2016 年度分 185 口，過年度分 25 口，前払い 1 口），院生会員 23 口（2016 年度分 12 口，過年度分 11 口）
(2) 第 23 回全国大会（大阪商業大学）開催校からの大会補助費剰余金の戻し入れ
(3) 第 25 回全国大会開催校大会補助費・第 24 回全国大会時のアルバイト代
(4) 第 23 輯 350 部買上げ
(5) 郵便振替手数料，銀行振替手数料
(6) 事務作業経費，ホームページ管理費等
(7) 手当単価 5,000 円×16 名
(8) 学会賞査読文献購入・送付料金
(9) 次年度繰越金

手元現金	108,303
預金（みずほ銀行）	34,452
総合口座（ゆうちょ銀行）	1,648,040
振替（当座）口座（ゆうちょ銀行）	23,790
	1,814,585

2017 年度収支予算

自：2017 年 4 月 1 日
至：2018 年 3 月 31 日

（単位：円）

収入の部		支出の部	
科目	予算	科目	予算
前年度繰越金	1,814,585	大会費 (3)	250,000
会費収入 (1)	1,472,000	年報買上げ費 (4)	780,000
賛助会員会費	60,000	年報発送費	50,000
雑収入 (2)	18,205	編集委員会費	40,000
当期収入合計	1,550,205	「通信」作成費	60,000
		会議費・交通費	350,000
		郵便・通信費	100,000
		振込み（払込み）手数料 (5)	30,000
		事務局費 (6)	250,000
		日本経済学会連合分担金	30,000
		経営関連学会協議会会費	30,000
		年報査読委員手当 (7)	60,000
		経営学史学会賞審査委員手当	30,000
		部会費 (8)	90,000
		名簿作成費 (9)	250,000
		経営学史学会賞副賞	90,000
		予備費 (10)	50,000
		当期支出合計	2,540,000
		次年度繰越金	824,790
合計	3,364,790	合計	3,364,790

注

(1)　納入率 80%（終身会員を除く）　計 1,472,000 円
　一般会員 8,000 円×219 名×0.8＝1,401,600 円
　院生会員 4,000 円×22 名×0.8＝70,400 円

(2)　第 25 回全国大会開催日程変更告知に関わる費用を含む

(3)　第 26 回全国大会開催校大会補助費・第 25 回全国大会時のアルバイト代

(4)　第 25 輯 320 部買上げ

(5)　郵便振替手数料，銀行振替手数料

(6)　事務作業経費，ホームページ管理費等

(7)　手当単価 5,000 円×12 名

(8)　1 回の部会開催補助として￥30,000

(9)　3 年に一度作成することにしている。これに伴って，予算に示した次年度繰越金となっている。

(10)　慶弔費等臨時経費

2016 年度経営学史学会賞の講評

2016 年度経営学史学会賞審査委員会は，今年度学会賞著書部門として岩田浩『経営倫理とプラグマティズム―ジョン・デューイの思想に依拠した序説的考察―』（文眞堂，2016.1）が相応しいと結論づけた。

本書は，動態的な経営倫理学の構築を目指した著作である。規範倫理学に依拠する伝統的な経営倫理学は，一般性，抽象性，ならびに実践不適合性を帯びやすく，意思決定状況における経営者の倫理的判断を捉えきれない。そこで，著者は経営倫理学のプラグマティズム的転回に向けての考察を試みるのである。

まず著者は，実利主義というプラグマティズムの通俗的な評価を斥け，人間の精神活動に含まれる知的ならびに道徳的な価値を重視する点にプラグマティズムの本質を見出す。そこから展開される倫理学は，形式主義や基礎づけ主義の呪縛からわれわれを開放し，行為者の倫理的判断そのものを問うことに向かわせる。その拠り所となるのが，J. デューイのプラグマティックな倫理思想の 3 つの特徴―「環境への適応性」，「社会性」，「動態性」―に他ならない。

つぎに著者は，この点に C. I. バーナードの管理責任論との親近性を認める。とくに，経営の意思決定状況のなかで，あらゆる道徳準則にも抵触しない行為を探求したり，新たな組織道徳を創造したりする経営者のプラグマティックな姿を，デューイの「道徳的探求の理論」との関連で論じるのは興味深い。飯野春樹門下として鍛えられたバーナード理解をベースに，デューイが説く道徳論との突合せは実に見事である。

昨今，政治哲学や教育哲学の分野において，古典的プラグマティズムを再評価する研究が盛んであるが，こうした研究に経営学者が約 20 年前から着手していたことは評価に値する。また，バーナード研究者の多くが W. ジェイムズとの思想的関連を主張してきたなかで，デューイの思想に注目したことの経営学史的意義は大きい。さらに，近代科学の真理追求では看過されてきた「美」と「善」についての考察も特筆に値する。

こうして本書は，経営者の倫理的なリーダーシップの結果として期待される新しい時代の姿を描く。それが教養主義社会である。産業革命以来，延々と続いてきた文明社会もついに自壊の危機に瀕し，それに代替する新しい文明社会が構想されなければならない。現代人の教養的知性を触発し，文明の発展に資するような経営価値を創造することで，経営と社会が同時に発展し得る方途を探求すること，それが経営者の実践哲学の展開に他ならないというのが本書の主張である。

以上，経営倫理学のプラグマティズム的転回は，現代社会における経営者の倫理的な意思決定行為を真正面から問うものであり，本書はその先駆的な研究であると評することができる。動態的な経営倫理学の構築に向けた歴史的かつ体系的な研究であるという点を高く評価し，審査委員会は本書を学会賞に値すると判断した。

経営学史学会賞審査委員長
杉田　博

経営学史学会賞（著書部門）の受賞のご挨拶

岩田　浩（龍谷大学）

この度は大変栄誉ある経営学史学会賞（著書部門）を授与いただき，誠に光栄に存じます。本書の「あとがき」でも触れたように，私がこの研究主題に取り組みだしたのは大学院修了間際のことでした。基礎づけ主義的な従来の経営倫理学をデューイ流のプラグマティズムの視点から再構成しようとする着想は，当時ほとんど無かったと思います。確たる先行研究が無い中，デューイや他のプラグマティズムの文献資料の解析を通し動態的な経営倫理学の可能性を模索していく作業は，労力がかかり結構難儀でした。そのため，本書に纏めるまでに相当の年月がかかってしまいましたが，奇遇にも，近年になって多様なジャンルでプラグマティズムを再評価する動きが見受けられます。その意味で，本書が経営学領野におけるその動向の一契機となれば幸いです。最後に，今回の受賞を励みに，今後とも研究・教育活動に取り組んでまいります。

2017 年度経営学史学会賞候補の募集について

2017 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までに公刊された著書・論文を対象として，2017 年度学会賞候補を公募中です。経営学史研究，比較経営研究等，本学会の目的に沿う会員の研究業績（著書・論文）の中で特に顕彰の価値を有するものに，「経営学史学会賞」が授与されます。著書部門については年齢不問ですが，著書部門奨励賞と論文部門の著書は，刊行時満 45 歳以下の年齢とします。

締め切りは，2017 年 12 月 31 日です。下記の要領によって，自薦・他薦でご推薦下さい。

推薦用紙は経営学史学会のホームページからダウンロードできますので，所定事項を記入の上，事務局まで郵送でお送り下さい。

応募資格：2017 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までに公刊された著書・論文（共著を含む）の自薦・他薦（院生会員を含む）による。

応募方法：要旨，意義，特色を 100 字程度にまとめ提出する。

推薦方法：選考対象作の推薦は，推薦者 1 名につき著書部門 1 点，および論文部門 1 点，計 2 点を限度とする。

応募期限：2017 年 12 月 31 日（消印有効）

審査方法：理事会が所管し，「学会賞審査委員会」を組織し，厳正に審査する。

経営学史学会年報第 24 輯『経営学史研究の興亡』の刊行

本学会の年報第 24 輯『経営学史研究の興亡』（文眞堂）が刊行され，第 25 回大会（青森中央学院大学）に参加された会員には会場で配布しました。大会に欠席された会員には郵送させていただきました。なお特別な場合（会費納入が 2 カ年以上滞っている場合）を除き，もれなく配布の手続きを取りましたが，万が一，お手元に届いていない場合は事務局（青森公立大学）へお問い合わせ下さい。

年報第 24 輯は第 24 回大会（九州産業大学）で報告された大会テーマの基調報告論文 1 編と統一論題論文 6 編，査読を経た自由論題論文 7 編，統一論題の各論文に関する文献一覧からなり，本学会年報に相応しい本格的学術書として完成しました。

本年報が経営学分野の基本文献として広く研究者の皆様に活用していただけることを願うと同時に，会員各位の学部および大学院の講義・ゼミでも，是非，お使いいただければと思います。会員には既刊年報も含め，各巻定価の 2 割引で販売しております。

年々，学生の専門書離れが進み，市販の専門書も苦戦を強いられている出版状況ですが，年報編集委員会としては，今後も本年報のレベルをさらに高めるべく努力していく所存です。また，それこそが，本学会の学術的社会貢献を果たす正道と確信しております。なお，年報第 25 輯の刊行に向けて，目下，編集作業中です。

年報第 1 輯～第 24 輯　バックナンバー

第 1 輯『経営学の位相』（1994 年 5 月発行）
第 2 輯『経営学の巨人』（1995 年 5 月発行）
第 3 輯『日本の経営学を築いた人びと』（1996 年 5 月発行）
第 4 輯『アメリカ経営学の潮流』（1997 年 5 月発行）
第 5 輯『経営学研究のフロンティア』（1998 年 5 月発行）
第 6 輯『経営理論の変遷』（1999 年 5 月発行）
第 7 輯『経営学百年』（2000 年 5 月発行）
第 8 輯『組織・管理研究の百年』（2001 年 5 月発行）
第 9 輯『IT 革命と経営理論』（2002 年 5 月発行）
第10輯『現代経営と経営学史の挑戦』（2003 年 5 月発行）
第11輯『経営学を創り上げた思想』（2004 年 5 月発行）
第12輯『ガバナンスと政策』（2005 年 5 月発行）
第13輯『企業モデルの多様化と経営理論』（2006 年 5 月発行）
第14輯『経営学の現在―ガバナンス論，組織論・戦略論―』（2007 年 5 月発行）
第15輯『現代経営学の新潮流―方法，CSR・HRM・NPO―』（2008 年 5 月発行）
第16輯『経営理論と実践』（2009 年 5 月発行）
第17輯『経営学の展開と組織概念』（2010 年 5 月発行）
第18輯『危機の時代の経営と経営学』（2011 年 5 月発行）
第19輯『経営学の思想と方法』（2012 年 5 月発行）
第20輯『経営学の貢献と反省―二十一世紀を見据えて―』（2013 年 5 月発行）
第21輯『経営学の再生―経営学に何ができるか―』（2014 年 5 月発行）
第22輯『現代経営学の潮流と限界―これからの経営学―』（2015 年 5 月発行）
第23輯『経営学の批判力と構想力』（2016 年 5 月発行）
第24輯『経営学史研究の興亡』（2017 年 5 月発行）

第 1 輯より第 9 輯までは品薄ですから，ご希望の方はお早めに注文されるようお勧めします。

第 26 回全国大会　基本計画

1．開催校と大会期日

2018 年度の第 26 回全国大会は，神戸大学で上林憲雄会員を大会実行委員長として開催される運びとなりました。会期は 2018 年 5 月 18 日（金）（運営委員会，理事会），19 日（土）～ 20 日（日）の予定です。

プログラムが確定次第，学会ホームページ上でお知らせします。

2．統一論題趣意説明：経営学の未来―経営学史研究の現代的意義を問う―

経営学史学会第 26 回全国大会の統一論題テーマは，「経営学の未来―経営学史研究の現代的意義を問う―」とする。その趣意は以下の通りである。

【統一論題の趣意】

一般に歴史研究の醍醐味の一つは，過去の長い時間的流れの中で現代を見つめ直し，未来のあるべき姿を構想していく点にある。それゆえ，広義の歴史研究として位置づけられる経営学史研究もまた，これまでの経営学の歴史を踏まえつつ，現代経営学の在り方を照射し，さらに経営学という学問の未来を見通し切り拓いていく役割を担っている。このような意味での「経営学史研究の意義」を改めて問い直し，それを「経営学」という学問自体の存在意義との関連で論じてみよう，というのが本大会の目的である。

元来「学史研究」の意義の一つは，当該学問の正当性を示すものであり，その学問の存在意義を，歴史的流れの中で浮かび上がらせ，そこから将来への展望を示すものであると考える。しかしながら，当学会においては，著名な経営学者の学説研究は深められてきたとは言え，真の意味での「学史研究―学問の歴史研究」が十分に行われてきたと言えるであろうか。本学会の核である「経営学史研究とは一体何なのか」。この根本的問題を問うことが，今，必要とされている。

この背景には，経営学という学問それ自体が弱体化しているのではないか，という危惧がある。つまり，経済学，社会学，心理学などの隣接諸学問の理論を援用して経営現象を説明しようとするアプローチは昨今多くみられるが，経営学という学問の特性や方法論を強く意識した理論研究や，それに根差した社会的インパクトの強い経営理論が生まれ難くなっているという現状がある。経営学とはいかなる学問であり，今後はどうあるべきか，このことを考えるために，経営学史研究は必要不可欠であると考える。

以上のことから，本大会では「歴史的視点」「未来的視点」という二つの観点を踏まえて，「学問の歴史」としての「経営学史」を論じたいと思っている。この際には，当然のことながら「経営学とはどのような学問なのか」ということに関する，論者の基本的視座が問われることになる。例えば，経営学の「対象」「問題」「目的」「方法」をどのように考えるか，といった「体系」ないし「枠組」である。また，今大会では，あえてサブテーマを

設定しない。なぜならば，「経営学の歴史についての切り口」自体が，その論者の歴史観や問題意識を示すことになると思われるからである。さらに，最終的に経営学の未来展望を議論するにあたり，その下位にサブテーマを設定することは，論者がそれぞれのアプローチや特定の課題のみを論ずるという結果となり，本来のテーマの意義を見失ってしまう危惧が生じるからでもある。論者には，上記のような観点から経営学史を論じた上で，現代の経営をめぐる「問題状況」を把握し，未来へ向けた「経営学の構想」をも示してほしいと考えている。

昨今の経営学研究がますます下位領域に分割され，分断された領域間での意思疎通すら時に困難となり，結果の出やすい短期的射程の「研究」が研究者の間で急速に増加しつつあるという現状のもと，果たして経営学という学問に明るい未来はあるといえるだろうか。経営学史研究は，この学問の未来に対し何を発信できるだろうか。また，そのためには経営学史研究はどのようにあらねばならないであろうか。これらの点を真摯に議論し，経営学の未来を切り拓く大会としたい。

3．自由論題報告者の募集

次回大会の自由論題報告を募集します。自薦，他薦とも積極的に応募していただきたいと思います。応募に際しては，①報告主旨を 1,000 字程度にまとめて，②直近の論文の抜き刷り，またはコピーを添えて学会事務局までお送り下さい。応募の締め切りは，**12 月 26 日（水）**です。

可能な限り，ご希望に添いたいと思いますが，多数の場合は運営委員会にて選考させていただきますので，予めご了承願います。報告論題は「自由」ではありますが，本学会での報告に相応しいテーマであることはもちろんのこと，原則的には**大会テーマの趣旨に沿うもの**がより望ましいということで審査を行っています。なお，院生会員の方は，**指導教授の推薦状を添えて**いただくことになっておりますので，応募時にはご留意下さい。

また，原則として自由論題報告も，大会報告に当日の議論を踏まえた上で改めて論文として仕上げていただき，**査読を経て**翌年 5 月刊行予定の年報第 26 輯に掲載されることになります。大会予稿集の原稿提出時点から年報刊行時点まで，約 1 年半の期間を要します。周知のように本年報は市販学術書でありますので，本年報の論文と同一または著しく近似のものが年報刊行以前に**他誌へ重複掲載されることのないよう**，厳にご注意願います。

新入会員・退会者

2017 年 5 月 26 日までに理事会で承認された会員異動は以下の通りです。（敬称略・受付日時順）

1．入会

氏　名	所属・職名	専攻分野
①福徳　貴朗	（上智大学・院生）	経営目的論，経営システム設計論（ワークデザイン）
②ヘラー，ダニエル	（横浜国立大学）	戦略論，ものづくり経営
③渡辺　圭史	（首都大学東京・院生）	経営戦略論，組織論
④石橋千佳子	（滋賀大学・院生）	経営管理，経営組織

※第 25 回全国大会後の理事会メール回議を経て，2017 年 7 月 15 日までに承認

⑤千田　直毅	（神戸学院大学）	人的資源管理論

※第 25 回全国大会後の理事会メール回議を経て，2017 年 8 月 31 日までに承認

2．退会

氏　名	所　属	氏　名	所　属
①角野　信夫	（神戸学院大学）	⑥岡本　康雄	ご逝去
②那須野公人	（作新学院大学）	⑦杉本　　常	ご逝去
③八木　良太	（尚美学園大学）	⑧大島　國雄	ご逝去
④井藤　正信	（愛媛大学）	⑨日高　定昭	ご逝去
⑤村山　元英	ご逝去	⑩水原　　凞	ご逝去

他自然退会 26 名

3．会員総数（2017 年 8 月 31 日現在）

①普通会員	220 名
②終身・顧問会員	15 名
③院生会員	23 名
合　計	258 名
賛助会員	2 社（3 口）

2017 年度会費納入のお願い

本学会の会費は下記の通りです。納入に際しては，会費請求書とともにお送りしました郵便振替用紙をご利用下さい。

小切手や現金での事務局への送金については，事務処理上，責任を負いかねますので，厳にお断りします。但し，所属機関の特別の事情により銀行振込が指定されている場合に限り，振込手数料を会員側が負担する条件で支払可能です。この方式を利用される場合は，事務局までお申し出下さい。

これまで院生会員として登録されている方で，院生から異動のあった方は，その旨，事務局までご連絡下さい。

会費を３カ年以上滞納の場合は，会則第４条５の規定により「自然退会」の処置となりますので，ご注意下さい。

学会費　１）普通会員：￥8,000
　　２）院生会員：￥4,000（大学院博士後期課程在籍者も院生会員です）
　　３）賛助会員：(1 口) ￥30,000

編集後記

経営学史学会第 25 回全国大会は，5 月 26 日（理事会），5 月 27 日，5 月 28 日の日程で青森中央学院大学において開催された。この場を借りて，大会実行委員長である小松原聡先生をはじめとする開催校の先生方に心よりお礼申し上げたい。今回のテーマは，「経営学史研究の挑戦」であり，サブテーマⅠが〈経営学史研究にみる実践への挑戦：経営学の“実践性”〉，サブテーマⅡが〈経営学史研究から実証研究への挑戦：経営学における“有用性”〉であった。各報告に関して活発で有意義な討論が行われた。また，今回の大会で役員選挙が実施され，第 9 期役員が選出された。既に第 9 期の理事会により次回全国大会の統一論題のテーマは，「経営学の未来―経営学史研究の現代的意義を問う―」として決定されている。来年度の神戸大学での全国大会における実り多い議論を祈る次第である。

（編集委員長　渡辺　敏雄）

経営学史学会通信　第 24 号　2017 年 10 月発行

発行所　経　営　学　史　学　会

事務局　〒 030-0196 青森県青森市大字合子沢字山崎 153-4
青森公立大学 経営経済学部　藤沼　司 研究室内
TEL：017-764-1658（研究室直通）
E-mail：gakushi-jimu@b.nebuta.ac.jp
経営学史学会ホームページ：
http://keieigakusi.info/
経営学史学会振込口座：
ゆうちょ銀行
加入者名：経営学史学会
振替口座：0160-5-789991